下町文化
NO. 260
2013.1.18

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

道しるべに誘われて

道に迷ったとき、あなたならどうしますか。
江戸時代、往来の人々に道を示してくれたものに
道標（道しるべ）があります。
道標や地図を頼りに、街中に江戸の古道を訪ねてみませんか。

③五百羅漢道標

②富士せんげん・亀戸天神・六阿みだ・あさくさ道道標

①鬼子母神道道標

⑤木下川やくしみち道標

④六阿弥陀道道標

○道しるべに誘われて
○江東の古道をゆく③
常光寺、亀戸天神への道
○江戸の町内探訪⑤（後編）
海辺大工町(2)
○江東歴史紀行
開発者の系譜～海辺新田～
○煉瓦に刻まれた歴史
東京市電気局
深川倉庫跡採取の煉瓦
○江東区芭蕉記念館企画展
◆近現代の作家と文化人～詩歌の世界～
◆和本にみる芭蕉・芭蕉庵
◆山鹿文子の布絵『おくのほそ道』

江東区は、震災と戦災により、大きく街並みが変わりました。ふだん何気なく歩く道も、復興のなかで新しく造られた道かもしれません。そのなかで、大切に守られてきた道標は、江戸の道を示してくれる貴重な文化財です。

本誌250・251号にわたり、亀戸の浅間神社の道標（写真②）の正面に刻まれている「富士せんげん・亀戸天神・六阿みだ・あさくさ」を手がかりに、新旧の地図をにらみながら古道を訪ねてきました。亀戸の古道探訪は今回で終わりますが、古道探訪は完結したわけではありません。みなさんも散歩がてら出かけませんか。

【写真】

①鬼子母神道道標
（東砂1―4―6 上妙寺）

②富士せんげん・亀戸天神・六阿みだ・あさくさ道道標　享和元年在銘
（亀戸9―15―7 浅間神社）

③五百羅漢道標　文化2年再建銘
（猿江2―16 小名木川橋台地）
※本誌257号で紹介。

④六阿弥陀道道標　延宝7年在銘
（亀戸4―48―3 常光寺）

⑤木下川やくしみち道標　宝暦11年在銘
（亀戸3―39 境橋橋台地）
現在、シートで保護。

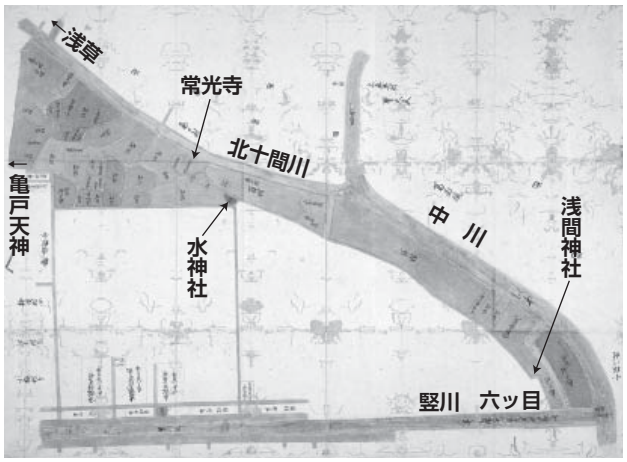
※主な道標です（区有形民俗文化財）。

江東の古道をゆく③
常光寺、亀戸天神への道

前回（本誌251号）に続いて、浅間神社（亀戸9）境内の道標が案内する江戸時代の古道を訪ねます。今回は、亀戸中央公園から、水神社（亀戸4）をへて、常光寺（同4）、亀戸天神（同3）へと続く道を歩きます。

亀戸の古道

まず、今回訪ねる古道を江戸時代の絵図で確認しておきましょう。左の天明元年（1781）「本所・深川割絵図」（区教育委員会所蔵）には、竪川の六ツ目から亀戸天神方面へ向かう道筋が描かれています。絵図は、道標が建てられた享和元年（1801）から20年前のものですから、当時の道筋を示しているとみてよいでしょう。



道は中川・北十間川に沿うように水神社まで通っています。道標には「富士せんげん・亀戸天神・六阿みだ・あさくさ」（1頁写真②）とありますので、絵図に見られるように、道は水神社から二筋に分かれ、亀戸天神へ行く道筋と、六阿弥陀（常光寺）・浅草へ行く道筋とがあったことが分かります。

道は亀戸の公園を通る

京葉道路からJR総武本線に向かう、現在亀戸7丁目と9丁目の境になっている道が古道の道筋です。

写真①は、亀戸7―26と9―37の間を通る道を総武本線の高架に向かって写したものです。高架に向かって左にカーブする様子は、明治13年（1880）の地図「東京近傍東部」（陸地測量部）に描かれている道筋と変わりがありません。

①

高架をくぐり、亀戸スポーツセンターの前から、水神社方面を望むと（写真②）、亀戸中央公園を貫通する形で、道は丸八通りまでまっすぐに続いています。公園は、昭和55年、日立製作所亀戸工場の跡地に開園しました。

②

道を進むと、丸八通りとの交差点に出ます。交差点から北十間川までの間の丸八通りは、かつてあった水路が道筋です。「江戸方角安見図」（延宝8年・1680）を見ると、この水路と北十間川・中川にはさまれた土地には、「本田下野守蔵やしき」と記されています。本多下野守は、当時陸奥国白河藩主であった本多忠平と考えられます。前回で触れた亀戸の旧家牧野家が所有していた「対馬屋敷」の西側が「本多屋敷」と呼ばれていたことから、本多家の屋敷地は、現在の亀戸9―27と35の境である道までひろがっていたとみられます。現在は、大部分が公園になっています。

明治末年に描かれた水神社

丸八通りから亀戸水神駅そばの踏切を越え、水神社へ向かいます。水神社に行き当たると、ここで道は二筋に分かれます（写真③）。

③

次頁の絵は、明治末年に描かれたという「水神森屏風」（6曲1隻、区教育委員会所蔵）の第1扇（部分）です。図の中央には、小高い築山の上に石祠が鎮座しています。現在の社殿は昭和35年に建てられたものです（『東京亀戸水神宮再建のあゆみ』）。水神社の手前には、古道が描かれ、江戸時代の道の景観がうかがえます。道の途中には、画面右側へ伸びる水路があります。この水路が後の丸八通りの道筋と思われます。

水神社に向かって右側を通る道を行くと、木に隠れていますが、常光寺の本堂とみられる瓦屋根が描かれています。左側の道を行くと右側には浄心寺・宝蓮寺、奥には香取神社・亀戸天神、そして天神橋が見えます。

（1頁写真④）が残されています。道標は、写真⑤の立ち位置側に、正面を川に向けて建っていたと考えられます。

常光寺から北十間川へ出る

水神社右側の道を行くと、蔵前橋通りに出ます。歩道橋で通りを越え、常光寺へ向かいます（写真④）。常光寺の正門の前を通る左側の道ではなく、右側の常光寺と都立江東商業高校の間の細い道を行きます。すぐに北十間川沿いの道に出ます（写真⑤）。この道筋が江戸時代の主要道とみられます。写真を撮っていた時、車がひんぱんに通っていました。

常光寺は江戸六阿弥陀めぐりの6番目として知られ、境内には「六阿弥陀道道標」

④

⑤

北十間川沿いの道を西方向に進むと、明治通りと交差します。右手の福神橋を渡れば吾嬬神社（墨田区）へ、左手に行けば香取神社（亀戸3）が見えます。吾嬬神社と北十間川が描かれている『江戸名所図会』挿絵（左図）は墨田区側ですが、江東区側の道の様子も同じような景観であったものと思われます。

明治通りを越えて浅草通りに入り、ほどなく右手に境橋が見えます（写真⑥）。橋のたもとには江戸時代より「木下川やくしみち道標」（1頁写真⑤）が建ち、境橋を渡って木下川

薬師（浄光寺・葛飾区、大正8年に現在地に移転）へと続いたかつての参詣道を示しています。左手に行けば臥龍梅で有名な「梅屋敷」（史跡・亀戸3―40、50～53）がありました。浅草通りは、横十間川に架かる柳島橋を渡って妙見堂（法性寺、墨田区）に至り、浅草へと続きます。

⑥

水神通りから亀戸天神へ

水神社に戻り、今度は左側の水神通りを進んで行きます（写真⑦）。通りは明治通りに向かってまっすぐに続いています。明治通りを右折し、さらに蔵前橋通りを左折すれば、亀戸天神はもうすぐです。

これらの道筋は、万治年間（1658～61）以降の本所深川開発にともなって造られた道が原型です。「本所・深川割絵図」を見ると、道筋がまっすぐに通っていることがわかります。『江戸名所図会』挿絵（左上図）には、亀戸天神門前を通る道が描かれ、横十間川に架かる天神橋を渡れば墨田区域です。

なお、天神橋の手前を右折すると、萩寺（龍眼寺）をへて柳島橋にたどり着くことができます。

※今回で亀戸の古道は終わります。

（文化財専門員　栗原 修）

⑦

江戸の町内探訪⑤（後編）

――海辺大工町（2）

前号では、海辺大工町の歴史、町の様子についてお話しました。そのなかで触れたように、両国橋の防災への関わりが、町の発展にとって重要な転機となりました。今号も『御府内備考』の記述にしたがい、前号の最後に取り上げた「両国橋御役舟艀下宿仲間」（以下「艀下宿仲間」）のお話からはじめましょう。

3、「艀下宿仲間」について

万治2年（1659）に両国橋が架けられ、代官伊奈半十郎に茶船（艀下船）持の仲間として出火・出水の際に両国橋を守るよう命じられる一方、橋際での稼ぎが認められたことは、前号で記しました。しかし、時代が下るにしたがい、海辺大工町にあった艀下宿の茶船持仲間が減少したため、他所の艀下宿稼業の者を仲間に加入させなければ両国橋を守ることが難しくなりました。そこで、文化11年（1814）5月に町奉行永田備後守に願い上げ、翌年3月に認められ「艀下宿仲間」を結成したのです。

減少の理由は、もともと小名木川が掘られる以前、この辺一円は百姓地で、深川村にも舟方渡世の者が多くいましたが、小名木川が掘られると、向いの深川村には武家地が多くなり、舟持は離散したとあります。しかも、当所とおなじ渡世の者が本所・竪川通、神田川辺にもできたため、「渡世向薄罷成」すなわち商売も少なくなり、「退散」する人が出たため、海辺大工町とその周辺の者だけでは、両国橋に関わる勤めに差支える、というものでした。

4、両国橋への対応とは？

それでは、のちに「艀下宿仲間」を結成した茶船持仲間が、万治年中（1658～61）から勤めた役儀とは、どのようなものだったのでしょうか。

まず、出水の場合は、水主60人迄が昼夜とも両国橋に詰め、出火の際は船30艘に水主が乗り込み、両国橋に詰めました。普段は、奥川筋（北関東）ならびに本所深川への往来諸荷物の積み送り稼業の場でしたが、非常時には船や水主を出して守ることが義務ずけられました。

その後、享保4年（1719）に町奉行支配になると、渡世仲間は「両国御役舟」と称し、重立ちの者3・4人が小頭役となり、仲間のことを差配しました。その際、町奉行は、両国橋南の方にあった東西の河岸のうち間口7間半の場所を役船仲間の稼ぎ場と定め、さらに東詰北の方の築立て場を拝領し、家作のうえ「役船会所」を設置し、番人を置いたとあります。

寛保2年（1742）の大水害後には、町奉行所が懸りとなって、水防用高速船の鯨船2艘が仕立られ、水主28人が御役船仲間の者に振り分けられました。ちなみに、鯨船は、8代将軍徳川吉宗が紀州の海で活躍していた捕鯨船に似せて造らせたといわれ、竪川一之橋たもとの石置場内に新築された船蔵に収められていました（「下町文化」254号掲載の「鯨船先丸の打直しと木場の目利き」参照）。しかし、「古来」より出火や満水に対しては、茶船持・艀下宿渡世の者が御用を自分の負担で、両国橋へ船を廻し、鯨船水主も町内の船乗を雇い入れ、御用を勤めていたようです。

両国橋（部分、『江戸名所図会』）

「艀下宿仲間」結成による役船仲間の構成について、久染健夫氏は「当初大半を占めていたとみられる海辺大工町の住民が約半数となり、他の地域の船持ちが参入した」としたうえで、「江戸の流通量の増大とともに、江戸の各所に河岸地が生まれ、艀下宿・船宿といった同業者が増加したことを背景としている」と指摘しています（「近世隅田川の架橋と深川住民・橋の維持と役をめぐって」『江東区文化財研究紀要』9号所収）。そして、「艀下宿仲間」の結成は、海辺大工町周辺住民が「両国橋周辺での営業権獲得・継続のためにも両国橋の維持管理に必要な役の存続を図っていた」としています（同論文）。

以上のように、小名木川と隅田川の合流地点にあった海辺大工町は、早くから流通の拠点でした。両国橋のみならず、新大橋の御役船、永代橋の懸り名主をも勤め、江戸時代を通して隅田川・小名木川の流通、橋維持に重要な役割を果たしました。

これで海辺大工町の町内探訪を終わります。

（文化財主任専門員　出口宏幸）

江東歴史紀行

開発者の系譜
～海辺新田～

江東区内には「海辺」という地名があります。現在では海岸線から距離のある地域になっており、「海辺」という名称に不思議な印象を抱く方もおられるかもしれません。この地名は、江戸時代初期に開発された「海辺新田」に由来しています。今回は、海辺新田の開発者一族について、史料（過去帳）を用いながらご紹介します。

海辺新田の開発

徳川氏の関東入国後、小名木川が開削され、その南岸に広がる茅野・沼地も開発が進められました。『新編武蔵風土記稿』によると、開発された新田は分散していたものの、いずれも海浜に面していたことから「海辺新田」と名付けられました。現在の町名でいうと、西は白河・三好から古石場、東は南砂一丁目という広い範囲に散在し、いまの江東区海辺はその一部分になります。

海辺新田の開発者は、次郎左衛門・平右衛門兄弟と伝えられています。兄弟は摂津出身とみられ、兄・次郎左衛門の家系が代々名主を務めました。深川村の分郷・六間堀の開発者でもあった彼らは、「六間堀村野之口」に住んで「野口」という名字を名乗ります（『御府内備考』）。

なお海辺新田の内では町場化していった箇所があり、それらは海辺大工町、蛤町など（「深川海辺町」と総称）となっていきます。

海辺家の成立

寛保元年（1741）、初代・次郎左衛門の子孫にあたる次郎右衛門（吉郎兵衛が改名）が名主役を退役します（理由不詳）。そのあと名主役に就いたのが、開発者兄弟の一方である平右衛門の子孫、八左衛門でした。彼は名字を「海辺」と改め、以後海辺家が名主役を務めることになります。

海辺家の過去帳

海辺家は、八左衛門以降も代々存続し、現在は区外にお住まいです。歴史資料としては過去帳のみお持ちということで、調査をさせて頂きました。

過去帳の形状は写真のように折本で、日付毎に戒名・命日・俗名・享年・続柄を記入していく形式になっており、全体で七一人の戒名が記されています。末尾には「昭和五拾六年」とあり、同年に写されたものと考えられます。

江戸時代に海辺家当主を務めた人物について、過去帳から得られた情報を表にまとめました。これをみると、海辺と改姓した初代八左衛門は「高村伊右衛門子」とあり、養子であったとみられます。また五代目八左衛門については実名（諱（いみな））も記され、「倍賢」と名乗っていたことが分かります。

年代が古いほど記載が粗くなり、特に初代八左衛門以前の人物は戒名と命日しか判明しません。このうち、院号をもつ男性は九人見出されます。『御府内備考』によると、先述の平右衛門から同書編纂時の当主である四代目八左衛門まで「十二代」と記されています（略系図参照）。よって、初代以前に院号をもつ男性九人のうち、八人が当主であったと考えると、この記述に合致します。現段階では確定できませんが、九人の戒名のなかでも古い方に、開発者・平右衛門のものが含まれているとみられます。

表　海辺家当主一覧

代数	没年	名前	院号
初代	延享元年（1744）	八左衛門（高村伊右衛門子）	桃源院
2代	天明6年（1786）	八左衛門	義峯院
3代	享和元年（1801）	八左衛門	古覚院
4代	天保14年（1843）	八左衛門	興隆院
5代	明治3年（1870）	八左衛門倍賢	本清院

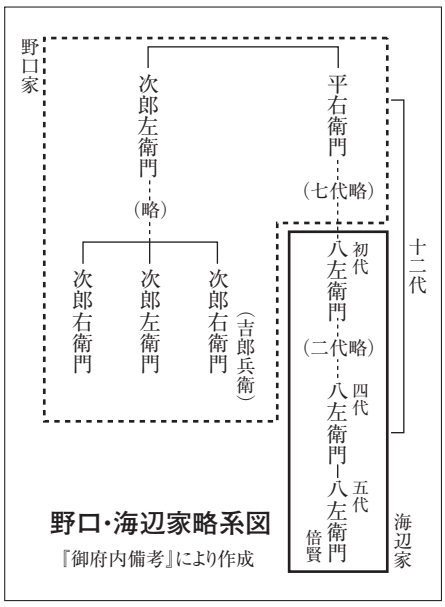
※初代～4代当主については、過去帳に代数が明記されていないため、没年から代数を推測した。

地名と名字

区内における他の開発地では、深川村（深川八郎右衛門）、相川町（相川新兵衛）、八右衛門新田（八右衛門）など、開発者の名前に由来する地名が複数存在します。この点は、江戸時代に新たに開発された深川地域の特色ともいえます。対して海辺新田から名字を採った海辺家には、どのような背景があったのでしょうか。

開発者一族と地域との関係解明が、今後進むことが期待されます。

（文化財専門員　藤方博之）



野口・海辺家略系図

『御府内備考』により作成

煉瓦に刻まれた歴史

東京市電気局 深川倉庫跡採取の煉瓦

平成22年4～6月に開催した「江東区埋蔵文化財展」（中川船番所資料館）に出品しました、白河1―7地点採取の煉瓦について、その後、新たに判明した事を加えてご紹介します。

煉瓦発見の経緯

平成22年1月、本地点において、集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の立会調査を実施しました。調査地点を含む白河1―7は、「干鰯場（銚子場）跡」（江東区登録史跡№27）であるため遺跡が発見される可能性がありましたが、調査の結果、遺構や遺物は確認されませんでした。しかし、施工担当者から解体時に採取した刻印のある煉瓦を保管しているとのお話があり、これを当係に提供していただきました。

図1　調査地点の位置

煉瓦の寸法は長さ228㎜、幅113㎜、厚さ62㎜を測り、一部火膨れと欠けがありますがほぼ完形です。胎土は赤褐色で、片面の平（ひら）の中央に刻印を配します。刻印は二重円で、内側の円には「風車」状の意匠、外側の円内の右には「電」、左には「路」の漢字が刻まれています。この刻印が何を意味するかは、土地の来歴を調べる過程で判明しました。

写真1　発見された煉瓦

昭和20年頃までの土地の来歴

調査地点を含む一帯は、元禄9年（1696）に干鰯場となります。小名木川の南岸に面し、敷地中央には船入堀が構築されていました。この場所には、数軒の干鰯問屋がありましたが、明治になると初代岩出惣兵衛がこの地を譲り受け、問屋と住居を構えていました。大正12年（1923）に起きた関東大震災により、三代目岩出惣兵衛（揚休）はこの場所から小松町二丁目（現佐賀2丁目）に移転します。

大正元年（1912）刊行の『東京市及接続郡部地籍地図』（東京市区調査会）を見ると、東大工町1―1、6、8～13は「岩出惣兵衛」が所有していたことがわかり、昭和9年（1934）刊行の『東京市深川区地籍図』『同地籍台帳』（内山模型製図社）では、岩出惣兵衛が所有していた土地（白河1―4・7）には「東京市電気局深川倉庫」および「東京市電気局工務課 深川軌道出張所」の注記があり、「軌道用地」として「東京市」が所有していたことがわかります（図1の範囲）。

東京市電気局の深川倉庫について

昭和5年測量、昭和12年修正の「一万分一地形図」（陸軍参謀本部陸地測量部）を見ても、調査地点一帯には「電気局倉庫」との注記があり、東京市電気局（以下、電気局）の倉庫があったことが分かります。同地図には、清澄通りに敷設された東京市電27系統（昭和21年以降は23系統）の軌道が見え、「清澄町」停留場北で分岐した引き込み線の軌道が見えます。軌道は煉瓦発見地点の南西である白河町1―4を通り、同1―7でさらに分岐し、船入堀の東西両側まで到達しています（図2）。国土地理院で所蔵している陸軍撮影の航空写真（昭和17年3月18日）では、軌道や建物、資材等が確認できます。『電気局三十年史』（東京市電気局、昭和15年）掲載の

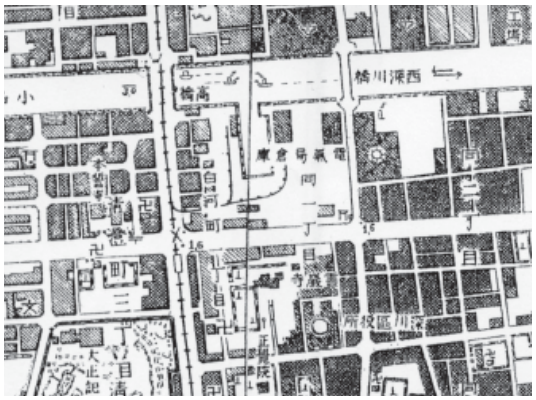


図2　昭和12年の調査地点
「一万分一地形図」（国立国会図書館蔵）

倉庫名	所在地	敷地坪数	建物坪数	貯蔵品種類
會計課 芝浦倉庫	芝區新芝町一	八、七四九坪	一、三八四坪	軌道電燈電車材料
〃 澁谷置場	澁谷區田毎町一	一、五二〇	—	杉電柱
〃 深川倉庫	深川區白河町一ノ一	五、九二二	五七七	電燈電路材料
〃 本局倉庫	麹町有樂町二ノ一三	（本廳舎内）	一二五	事務用品
計 一三倉庫 置場		一六、一九一	二、〇六三	

図3「倉庫所在及び其の概況」
『電気局三十年史』
（東京都立中央図書館蔵）掲載

表（図3）によれば、昭和14年時点でこの場所に深川倉庫があり、「電燈電路材料」を貯蔵していることが分かります。『電気局三十年史』掲載の職制（昭和15年現在）を見ると、会計課倉庫掛の管轄と分かり、『東京市電気局員録』（交通新報社、昭和8年）では、深川倉庫に12名の職員が勤務していたことが分かります。

いつ深川倉庫が設置されたかについては、典拠は不明ですが、『江東区年表』（江東区役所、昭和44年）で、昭和元年（1926）2月27日、「東京市電気局で深川東大工町銚子場付近の土地を買い入れ倉庫を建て引込線の工事に着手」と見えます。昭和18年（1943）5月には、深川倉庫の一部である深川白河町1―1に白河国民学校の新校舎が落成しているので、これより前までには敷地が縮小していたと推定されます。『東京都交通局四十年史』（東京都交通局、昭和26年）には、「電車事業建物戦災と復旧状況」（昭和26年3月調べ）と題した表において、深川倉庫が戦災で415坪（約1370㎡）を焼失したと見えます。同表では「既復旧坪数」および「仮復旧」の欄はハイフンで示されており、「今後復旧所要額」には金額が示されているため、この時点では、倉庫の敷地はあったものの復旧していなかったことが考えられます。戦後初めての住宅地図である「江東区火災保険特殊地図」（昭和27～29年作成、都市製図社）を見る限り、東京都交通局（昭和18年に東京市電気局から名称変更）の倉庫の表記は見当たらないので、この時点ではすでに撤退していたと推定できます。

煉瓦の用途と事例

以上のことから、煉瓦の刻印内円の意匠は電気局の局紋、同外円の文字は「電路」と読み、「電燈電路材料」の一部と推定されます。

ここで、電気局の刻印のある煉瓦の他の事例について紹介します。

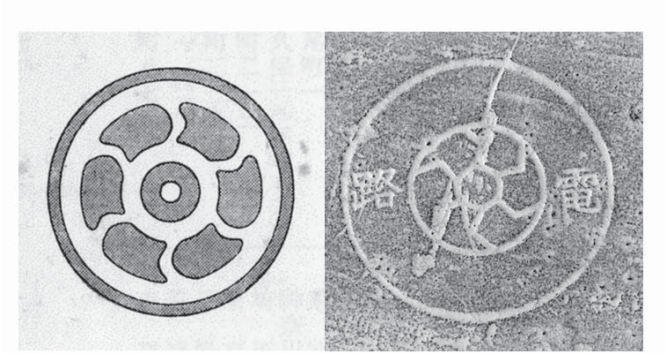


図4　煉瓦刻印拓本（右）と東京市電気局局紋（左）
※局紋は『東京市電気局員録』（東京都立中央図書館蔵）掲載

・台東区台東2―22出土例

立会時に1点が出土しています［小俣悟氏（台東区教育委員会）、中野高久氏（元台東区文化財調査会）のご教示による］。なお、出土地点西の昭和通りには市電22系統（のち21系統）の軌道がありました。

・東京都交通局所蔵例

電気局の後身である東京都交通局では、3点の煉瓦を所蔵していますが、そのうち2点が白河出土のものと同じ刻印です（1点は局紋のみ）。なお、3点の煉瓦は、平成23年7～9月に江戸東京博物館で開催された「東京の交通100年博」で展示されました。

・港区芝浦所在例

港区の船路橋（ふなじばし）南橋詰（芝浦4―22地先）の路面に17点がモニュメントとして埋め込まれています。ちなみに、この橋は芝浦4丁目に存在した市電の工場へ渡る専用橋で、平成19年まで路面には引き込み線の軌道が残っていました。

写真2　港区芝浦4丁目所在煉瓦

・埼玉県草加市立歴史民俗資料館寄託資料例

建物解体中に煉瓦5点が発見され、このうち4点に刻印が確認されています。所蔵者のお話し（伝聞）によれば、「東京駅で使用されていたもの」とのことです。草加市周辺は大正初期頃、煉瓦工場がいくつか造られていますが、この伝聞情報により、東京方面より持ち込まれ、建物の構造材として転用したと考えられます（草加市立歴史民俗資料館　大嶋定氏のご教示）。

写真3　埼玉県草加市の煉瓦

前述のとおり、白河以外に4つの事例が管見の限り確認できます。白河、港区、草加市の事例を比べると、刻印の意匠は同じですが、外円の径はそれぞれ77～80㎜、69～72㎜、87～93㎜とまちまちです。また、漢字や局紋などに微妙な違いがあるため、数種類の刻印があったことが推定されます。

使用用途については、東京都交通局総務部お客様サービス課担当職員のご教示によれば、施設の建物に使用された可能性と、ケーブルを収納するトラフの蓋として使用された可能性があるとのことです。

（文化財専門員　野本賢二）

江東区芭蕉記念館企画展

◆近現代の作家と文化人～詩歌の世界～
◆和本にみる芭蕉・芭蕉庵
◆山鹿文子の布絵『おくのほそ道』

4月21日(日)まで

現在開催中の企画展では、3つのテーマで展示を行っています。この機会にぜひ、ご覧下さい。

【近現代の作家と文化人～詩歌の世界～】

俳句は、明治時代に独立した文芸として正岡子規らによって提唱されました。今回の展示は、その明治時代～昭和時代にかけて活躍した作家たちの作品が中心となっています。

小説『金色夜叉』の尾崎紅葉、『羅生門』や『鼻』の芥川龍之介。私達は教科書や文庫本でその長い物語を知ることが出来ます。しかし展示作品は、小説とは異なった表現世界であり、それぞれの思いや個性から、彼らの違った顔を見ることが出来ると思います。ここではその作品の一部を紹介します。

夏目漱石　短冊

夏目漱石の俳句「白菊と黄菊と咲いて日本哉」『吾が輩は猫である』『坊ちゃん』で知られる漱石は、俳人の正岡子規と深い交流がありました。松山中学校にて教師をしていた20代後半頃から本格的に俳句を作り始めました。俳号は愚陀仏、小説家として多くの作品を残す一方で、約2600句の俳句を残しています。

岡本綺堂の俳句「尺八を聞くや夜寒の小紫」『修善寺物語』を書いた綺堂は、本名を啓二、歌舞伎などの劇作家として活躍します。シャーロック・ホームズの影響を受けて『半七捕物帖』が誕生し、中国やイギリスの怪奇物を翻訳したりしながら、外国文化の影響を受けた一人でもあります。

辰野隆の俳句「才を弄して春寒きふところ手」今回初の展示作品です。フランス文学者の隆は、東京駅や国技館の設計で有名な辰野金吾の長男です。父とは違う道の文学研究を志し、東京帝国大学教授を務め、小林秀雄など文学者を育てあげます。先述の夏目漱石は結婚式に出席する程の親交があり、今回展示作品の一つである谷崎潤一郎とは中学以来の仲であったりと、当時の文学者たちと多くの繋がりがありました。

また、かつて深川にあった興行場〝深川座〟の『明治三十七年十月十四日』の歌舞伎番付も初公開します。深川座は油堀川近くの清澄通り沿いに位置し、明治30年に開場、芝居・曲芸などを興行しました。永井荷風の「深川の唄」には当時の様子がよく描かれていますが、後に関東大震災で焼失しました。本資料は興行主が宣伝用に配った番付で、演目と役者名が記されています。

更に歌舞伎という繋がりから、八代目市川中車や初代中村吉右衛門ら、粋な歌舞伎役者の俳句も展示しています。

この様に今回の展示では、作家や文化人として私達が知っている本業とは異なった知られざる横顔をご覧頂きたいと思います。

【和本にみる芭蕉・芭蕉庵】

芭蕉の顔は知ることが出来ませんが、後世の人々は様々な芭蕉やその庵の様子を描き残しています。作品を見ながら、その人となりを想像してみてはいかがでしょうか。

渡辺崋山　芭蕉像

前期企画展にて好評だったため、今回は会期を延長して展示しています。

【山鹿文子の布絵『おくのほそ道』】

山鹿文子さんは、長年江東区に在住し、70歳を越えてから、古ぎれから「布絵」の手法に取り組みました。今回は、平成7年に喜寿の記念で展示後、寄贈された全56作品中、選りすぐりの34作品を展示します。

山鹿文子　布絵『おくのほそ道』

開館時間　午前9時30分～午後5時（最終入館4時30分）
休館日　第2・4月曜日（祝日の場合は翌日火曜日が休館）
入館料　大人200円・小中学生50円
問合せ　☎03(3631)1448